

## ❖ 「自分が生きる現実も、捨てたものじゃない」



先日、コンビニで小説を買うという初めての体験をしました。少ない品揃えの中からほぼ消去法で選んだ本が「ミッキーマウスの憂鬱ふたたび」（作：松岡圭祐）というものでした。憧れの「ディズニーランド」で働くことになったものの、夢の国の現実を目の当たりにした主人公が理想と現実の狭間で葛藤し、もがきながら新しい目標に向かって進んでいくというストーリーです。

最初は19歳の主人公にとっても感情移入はできそうもないと思っていたのですが、次第に、憧れていた職場に就職したはずなのに「仕事を辞めたい」と泣きながら電話をしてくる娘や、希望の進路に進んだはずなのに「ここではなかったかもしれない」と葛藤する生徒達の姿と重なり、いつしか主人公の坎ナを心から応援していました。本の最後には、こんな解説がありました。

…やる気はないけど、ほかに働けそうな場所もない。夢を抱いて働き出してみたものの、その魔法がとけてしまった。坎ナと同様に、「こんなはずじゃなかった」と立ち止まっている人は、実はかなり多いのではないのでしょうか。…「夢」を見て「現実」を見る。けれど、その夢から覚めたとき、自分が生きる現実も、捨てたものじゃないと、少し信じられるようになる。青春とはその繰り返しで、これこそが成長小説の醍醐味だと思うのです。…

娘や生徒の姿を重ねて…と書きましたが、そういえば私自身も仕事を始めた1年目には「本当にこの仕事でよかったのか?」「もっとふさわしい場所があるのでは?」などということを繰り返し考えていたことを思い出しました。そして同じような悩みを抱える多くの若い先生方に「私がこの仕事で良かったと心から思うようになったのは、25年ぐらい経った時よ。」と話していたことも思い出しました。そうか、あの葛藤こそが「青春」そのものだったのかもしれないと妙に納得した一冊になりました。

実はこの本は、「ミッキーマウスの憂鬱」という本の続編だったことを後で知りましたが、いずれもディズニーランドの裏側を覗くことができる楽しい一冊です。青春真っ只中にいるみなさんが読んだら、きっともっと共感できるのではないかと思います。2年生のみなさん、修学旅行で訪れる夢の国ではしっかり魔法にかかって楽しんでください。そして、様々な思いを抱えながらも、決して笑顔を忘れない「キャスト」と呼ばれるスタッフの方々のプロ意識と仕事に対する誇りを感じてきてください。



### 学校外の電話等で相談ができる機関

長崎県子ども・若者総合相談センター「ゆめおす」 095-824-6325 (10:00~22:00 日本祝休み)  
yumeosu@n-kodomo-wakamono.jp

24時間子供SOSダイヤル 0120-0-78310 (通話料無料) ※SNS相談可

SNS相談窓口「スクールネット@伝えんば長崎」(LINE・Web) ※受付時間：24時間